

知事服部一三とその史料

兵庫県公館県政資料館所蔵の服部一三知事関係資料について

伏谷 聡

はじめに

兵庫県公館県政資料館に所蔵してある資料で知事にちなむものはいくつかある。たとえば、展示室に掲げられた伊藤博文の扁額のような書類がほとんどである。

兵庫県公館県政資料館の資料を利用しようとする方々からは、館は県の施設なのだから、所蔵資料に県知事関係史料が含まれていて当然だと思われるようだ。実際にはそうではないのだが、知事の事蹟や履歴に係る史料の有無を確認する電話で、そういったものはほとんどない、と返答すると一様にながかりされた。

ところがそうだった状況にもいささか変化があるのではないかと思わせる史料群が寄贈された。それが服部一三知事関係資料である。以下、服部一三という人物や時

代を紹介しつつ、この史料群の紹介をしよう。

なお、本稿は本年度県史セミナーとして講演した内容をもとに、改訂し構成を変えて原稿化したものである。

1 服部一三知事関係資料

平成十九年(二〇〇七)一月、第十三代兵庫県知事(明治三十三年 一九〇〇 から大正五年 一九一六)であった服部一三の御子孫より、兵庫県公館県政資料館へ御所蔵の史料を寄付する申し出があつた。いただいた史料群は服部一三銅像一躯・書画軸七点・画冊二点・刊行物七点・写真三五点・書類三三三六点あわせて三八八点である。

そもそも、服部家は先代が知事であつた縁から、昭和四十一年(一九六六)に県史編集室が『兵庫県百年史』を編纂するさい、資料提供の面で御協力をいただいた。県

政資料館で収蔵する県史関係の史料のうちに、提供史料の複写物が残されている。御寄贈いただいた史料には、そのとき収集した複写史料の原物が含まれているのではないかと期待されていた。しかし、そうした史料はほとんど見られなかった。現在とは史料の現状が変化したことが惜しまれる。



写真1 服部一三



写真2 服部一三の銅像

銅像（写真2）は高さ八五センチメートル、胸部周囲六五センチメートルで、フロックコート姿で右手を腰にあて左手は書を持つ姿形である。写真は、写真帳で表紙が外れている状態のもの三冊分とバラの写真が二五点で、写真枚数にして三一五枚ほどあった。これらの一部は『兵庫県百

年史』に利用された。うち、服部知事時代の知事官舎、大倉山公園にかつてあった伊藤博文像の除幕式の写真があり、服部知事時代の兵庫県が撮影されていて興味深いものである。書簡類等については後述する。

2 誕生・留学・文部省入省

服部一三の生い立ちについては、服部二三景翁伝⁽¹⁾（以下『景翁伝』と略す）に拠って説明する。

服部一三は嘉永四年（一八五二）、長州藩槍術指南役渡辺兵蔵の三男として山口県吉敷郡吉敷村に生まれた。吉敷村は県庁所在地山口の近郊で、湯田温泉のすぐそばである。一三は幼名を猪三郎といい、元服の頃に愷輔、のちに一三に改めた。

一三が七歳のころ、安政四年（一八五七）に郷校憲章館に入学した。このときの学頭は片山哲次郎こと名和緩^{なわゆるむ}で、この縁により（慶応元年 一八六五 ころ）哲次郎の養子となり、哲二郎が生家服部家の名を継ぐ際、一三も同時に服部を名乗るようになった（哲二郎はこののちさらに改名し、名和緩と名乗る）。

ちなみに兵庫県知事を務めた内海忠勝は、本資料群中

表1 服部一三履歴

年 月 日	西暦	事 項
嘉永4年2月11日	1851	山口県吉敷郡吉敷村 渡辺兵蔵三男 猪三郎として生まれる
慶応元年ころ	1865	郷校憲章館学頭で恩師の服部(片山) 哲二郎の養子となり養家継承
明治2年	1869	服部一三の留学
明治4年6月	1871	ニュージャージー州ニューブランズウィック予備学校卒業
明治8年6月	1875	ラトガースカレッジ理学部バチュラー・オブ・サイエンス取得帰国
明治8年9月2日	1875	文部省督学局雇
明治10年9月8日	1877	東京大学法学部、文部省綜理補兼任
明治13年	1880	日本地震学会初代会長に就任
明治13年4月23日	1880	東京大学法・理・文各学部綜理補、同予備門主幹を兼務
明治13年6月2日	1880	文部省少書記官
明治13年6月4日	1880	東京大学法・理・文各学部綜理
明治14年7月14日	1881	東京大学法学部長兼務同予備門長
明治15年2月15日	1882	東京大学幹事
明治17年10月25日	1884	農商務省御用掛 ニューオルリンズ万国工業博覧会開設につき事務官として派遣
明治18年2月28日	1885	ニューオルリンズ博覧会終了後学事取調のため3ヶ月米国滞在
明治18年7月11日	1885	米国を発しヨーロッパに向かう
明治19年1月8日	1886	ヨーロッパ経由で帰国
明治19年1月21日	1886	小学校条例取調委員
明治19年3月3日	1886	文部省書記官
明治19年6月1日	1886	文部省参事官兼任
明治19年9月27日	1886	文部省参事官兼文部省書記官
明治19年11月24日	1886	教科図書検定主幹
明治21年2月6日	1888	明治22年開催パリ万国大博覧会出品調査委員
明治21年2月24日	1888	尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員
明治21年6月25日	1888	東京職工学校組織取調委員
明治21年7月3日	1888	東京職工学校委員
明治22年3月9日	1889	尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定委員
明治22年4月20日	1889	文部省普通学務局長
明治22年10月2日	1889	第3回国勧業博覧会出品取調委員
明治22年12月11日	1889	第3回国勧業博覧会審査官
明治23年6月10日	1890	東京高等工業学校商議委員
明治23年9月10日	1890	東京盲啞学校校長事務取扱
明治24年4月24日	1891	岩手県知事
明治31年7月28日	1898	広島県知事
明治31年12月28日	1898	長崎県知事
明治33年10月25日	1900	兵庫県知事
明治36年	1903	貴族院議員
大正5年4月28日	1916	知事辞任
大正8年4月	1919	万国議員商議員としてベルギーへ出張
大正8年11月	1919	神戸商工会議所内に国際連盟神戸支部開設、支部長となる
昭和元年	1926	国本社神戸支部長となる
昭和4年1月25日	1929	病没

に名があがる人物であるが、同郷でしかも同門である。服部一三の生誕した年に内海が入学した。

学頭の片山哲二郎は文久二年（一八六二）に、尊皇攘夷運動のグループ良城隊を組織し活躍した。一三ら少年たちもこうした運動に刺激されて村に世忠団を組織した。

慶応元年には長州藩遊撃隊に入隊した。ここで、開国論に接し英語の習得と留学の必要を感じたよう⁽²⁾で、慶応三年（一八六七）の春、英国留学する長州藩士河瀬真孝の長崎随従を許可された。一三はここ長崎で洋学修業を始める。彼はのち英国総領事となるイギリス人のロバートソン、おなじくのち領事となるアストンの二名に師事した。また大隈重信の致遠館で大隈やフルベッキにも学ん



写真3 アメリカで撮影された服部一三（後列左）と養父名和緩（前列左）

だ。長崎では伊藤博文や井上馨の居宅で生活し、渡航の機会を窺っていた。じつはこのとき、長崎にいた岩倉具視の二人の息子具定・具経もフルベッキのもとで勉学に励んでいた。

さて、明治初年の明治政府内では、有為の青年は身分を問わず留学させるべき意向があつたよう⁽³⁾で、岩倉具視の二人の息子も明治二年（一八六九）末にこの方針により米国ニューヨークブルズウィックへの官費留学が決定する。この二人とともに青年三人が推薦されたが、この中の一人が服部一三であつた。

一三は明治四年（一八七二）六月、ニューヨークブルズウィック予備学校を卒業、明治八年（一八七五）六月にラトガースカレッジ理学部でバチュラー・オブ・サイエンスの学位を取得した。

ところで、養父名和緩は、服部が留学した翌年、明治三年（一八七〇）十二月に米国在勤少弁務使として赴任する森有礼の随行人として選ばれた。これ以前、明治元年に京都の岩倉具視邸に身を寄せ、岩倉はじめ木戸孝允とも知り合っていた。翌年八月に新潟県大参事の職を得て赴任するが、十月に辞職する。そして明治三年にいたり

アメリカにわたり、ボストンにて独習で勉学に励むことになる。

名和も一三ともに岩倉具視のコネクションで渡航先に行っている点が目目される。留学といっても海外渡航の手段はまだ船便に限られており、両名の渡航のしかたからみて、当時独力で船旅をするのは、手続き上も経済的にもかなり困難があつたのであろう。

名和はその温厚な人柄から、留学中の青年達で慕うものがいた。団琢磨もそうした若者で、彼の伝記中に名和に芝居見物をせがんだエピソードが紹介されている⁽⁴⁾。しかし、その名和は、一三がまだ留学中の明治六年(一八七三)十二月十七日に客死してしまふ。史料の中にボストンの墓地にある、名和緩の墓を撮影した写真が残されていた⁽⁵⁾。

なお、一三の子息、服部兵次郎はその随想記中、父一三が米国留学中の明治四年(一八七二)二月二十六日に、渡米した名和緩がニューヨークに来ることを知り、会いに行った日記があることを記している。⁽⁶⁾『景翁伝』でも留学期間中の日記が存在していたことに触れられているが、史料群のなかには見当たらなかった。資料群の写真には

洋装の一三と名和緩が一緒に写っている写真があつた。キャプションに「米国にて」とあることから、服部兵次郎の記述が全く根拠のないものではないことがうかがわれる(写真³)。

一三は学位取得後すぐ帰国し、九月に文部省督学局に奉職し、以後県知事を歴任する明治二十三年(一八九〇)まで同省に勤務した。文部省では明治十年(一八七七)四月に東京大学法学部総理補をはじめ、教育関係の重職に就いた。右をはじめとして、学校関係の諸委員に任命されており、教育現場に関わる仕事を主にしていたことがわかる。

文部省時代に特徴的なできごとが二点ある。一つは明治十三年(一八八〇)日本地震学会の創設に伴い初代会長に就いたことだ。意外に思われるかもしれないが、当時東京大学の地震学研究室に掲げられていた中国は漢時代に作られた張衡の候風地動儀の図という、地震学史の参考資料を一三が作らせて寄贈した絵があつた。一三は地震学に関心を寄せていたようで、これが機縁となつて会長に推薦された⁽⁷⁾。

もう一つは、文部省に奉職していながら産業関係の職

務を命ぜられていたことだ。中でも明治十七年（一八八四）アメリカニューヨークリンズで開催された万国工業博覧会に派遣された。じつはこの博覧会期間中にラフカディオ・ハーン（小泉八雲）に初めて逢うことになるのである。⁽⁸⁾ 右派遣をはじめ、産業関係の委員を度々引き受けている。こうした経験はおそらく、知事時代の二三が行う地方産業の政策に生かされていったことだろう。

3 知事時代・退官と死去

一三は明治二十四年（一八九一）四月二十四日に岩手県知事を拝命する。当時の知事は官選であったため、官僚から知事へ、知事からまた官僚へとというコースはめづらしくない。その後、明治三十一年（一八九八）七月二十八日に広島県知事、同年十二月二十八日に長崎県知事を歴任し、明治三十三年（一九〇〇）十月二十五日に兵庫県知事となる。

兵庫県知事の場合、文部省出身者は珍しい。一三以降の知事は内務省出身者で占められるから、服部一三が藩閥出身知事が多かった時代の最後の世代ということができる。

このころ政治面では、明治七年（一八七四）の民選議院設立建白運動をきっかけにして自由民権運動という民主化運動が始まった。不平士族や農民を巻き込みながら成長し、明治十年代後半には各地で激化した。政府もこの鎮圧に乗り出し、また保安条例により首都から運動家を追放した。このようなことから、民権運動は地方で深まりを見せるようになる。兵庫県もこの影響を受けた。兵庫の近代史によく引用される新聞「神戸又新日報」は、もともと淡路の五州社という民権運動の一派（改進黨系）の人々が作った。

明治二十二年（一八八九）二月に帝国憲法が發布され、翌二十三年（一八九〇）七月に第一回衆議院議員選挙が行われ、日本における議会政治が本格的に始まる。県会でも徐々に政党所属の議員によって運営されるようになる。また、産業の面で日本は「富国強兵」「殖産興業」を掲げ、とくに工業の分野で官主導の産業強化策が行われる。近代初期の兵庫県では、在来産業の把握と同時に兵庫製作所などの官営工場が開かれる。一方、マッチ工業と紡績業を中心に阪神地区に新たな産業が創造される。電信・鉄道・ガス灯などのいわゆるインフラは明治初期よ

り引かれていた。神戸の工業は、明治二十一年（一八八八）九月に電灯が導入されたところから、造船・鉄工などの重工業化が図られるようになった。現在にも引き継が

表2 服部知事時代のおもな県政・県史

年 月 日	事 項
明治 33 年 10 月	服部一三知事就任
明治 34 年 4 月	兵庫県立高等女学校開設
明治 34 年 6 月	県農会設立
	兵庫県第二師範学校開校
明治 34 年 8 月	兵庫県第一師範学校を兵庫県御影師範学校、第二師範学校を兵庫県姫路師範学校と改称
明治 35 年 5 月 24 日	4 代目新県庁舎竣工
明治 36 年 3 月	県耕地整理組合期成会発会
	官立神戸高等商業学校開校
明治 36 年 6 月	兵庫県明石女子師範学校開校
明治 37 年 4 月	兵庫県立工業学校開校
明治 43 年 4 月	県立姫路高等女学校開設
明治 44 年 4 月	神戸市立図書館設立
大正 2 年 1 月	神戸で憲政擁護大会
大正 4 年 3 月	山田川疎水竣工
大正 5 年 4 月	清野長太郎、知事に就任

れている有名企業の工場がつきつきと設立された。

政治や産業が成長してゆくとともに、近代化における社会のゆがみも問題となってきた。明治二十三年（一八九〇）に最初の恐慌がおこり、江戸時代以来の職人が賃労働者となり、労働者階層がいつそう拡大した。こうなると労働者の労働条件や環境が問題視されるようになり、低賃金・長時間労働・婦女子使役などの労働問題がクローズアップされるようになった。こうして労働者が生活改善などの要求をする労働運動が明治四十年代から増加するようになった。労働運動は、兵庫県の場合、社会主義思想などの影響から激化して大正期に三菱の大争議事件などへ発展するコースと、またキリスト教的社会主義による慈善事業的な労働者の救済・相互扶助をテーマに据えた賀川豊彦らの活動により、神戸購買組合創設（コープ神戸の前身 大正十年 一九二一 創設）などに向かうコースの二つの場合があった。

以上が一三が兵庫県知事だったころの兵庫県の状況である。

このころの県が行った事業で産業政策にしる土木事業にしる、すでに明治二十年代ごろから始まったものが多

い。ただ、一三の伝記では、彼が文部官僚時代に農商務省の仕事にも関与したことで実施したと考えられる産業政策と教育事業について紹介している。

産業政策では農業に力をいれており、東播五郡の土木事業を実施したが、これも目的は農業用の治水政策であった。

教育事業では文部省時代に教育行政に携わった立場から、いくつかの県立校設立を果たしている。

このうち大正五年（一九一六）四月二十八日に兵庫県を退官した。

退官後、一三は貴族院議員として活動する。なかでも国民精神の発揚に尽力し、昭和元年（一九二六）には平沼騏一郎が会長となっていた国本社の神戸支部長に就任する。国本社は大正十三年（一九二四）に設立された団体で、構成員のうち半数を軍人、官僚で占めたという。また、発行紙「国本」は反共・反デモクラシー・反既成政党を主張する論説や国粹主義的な論文を掲載した。ただ、服部一三が退官後になおこうした運動に身を置こうと考えることは、意外かもしれない。しかし、一三のように、これから近代国家を作り上げようと言う時期に、政府や

地方で活躍した官僚が、なお政府を、国家を応援したい、と願うのは自然なことであったのであろう。

こうして昭和四年（一九二九）一月二十五日に服部一三は七十九歳の生涯を終えた。

4 史料

史料群の大半を占めるのは書簡で、明治初期から昭和初期までが見受けられた。内容と封筒はほぼ一致しているようだ。

史料群の書簡は封筒付で年紀のない事が多く、知事あて、または知事官舎あてとなっているものがほとんどである。消印が鮮明なのが幸いで、年紀の推定に大いに役に立った。知事時代は明治二十四年（一八九一）以降である。消印の年月日表記は「25（年） 10（月） 23（日）」のように書いてある。年の部分が24以上であれば「明治」で、宛先が知事名あてで、一桁の数字であれば大正というように、消印だけでも年号の推定がかなりの確にできるのだ（表3）。

以下、特色のある史料を時代、内容にしたがって紹介したい。

表3 時期別に見た年紀のわかる史料の数

時 期	史料数	備 考
留学時代	13	うち名和関係 11
文部省時代	8	
知事時代（兵庫県赴任以前）	42	
兵庫県知事時代	110	
晩年	37	

留学時代

本時期の特徴のある史料は、一三の養父名和緩が出した書状である。名和緩関係の史料は、明治六年（一八七三）の名和の死亡までと限られるので、史料に年紀がなくとも当該時期と判別できる。

名和の書状⁽⁹⁾から、米国派遣時の上司森有礼が信仰したキリスト教系のいわゆる新興宗教の影響を受けていたことがわかる。この宗教はトマス・

つた。書状中にはもらった日本の植物の栽培を試験的にプロクトンで行う旨の記述がある。

名和は渡米直後に森に連れられプロクトンへ行っている。森の目的が勧誘にあったかどうかは分からない。

文部省時代

この時期の史料はほとんどないが、妻鈴子あての書状が目される。

前述の如く、明治十七年（一八八四）にアメリカのニコルリンズで万国工業博覧会が開催された。そこで好評だった日本館の評判について書き送っている⁽¹⁰⁾。また、一三は博覧会後に、派遣されたアメリカではなくヨーロッパに留学する。書状によれば、アメリカ大統領交代の時期でアメリカ側の官吏が親身に相談に乗ってくれないこと、師事すべき人物のいないことからヨーロッパ留学に希望変更したい旨が記された。

レイク・ハリスが設立した「新生兄弟会」で会の場所はニューヨーク近郊にあった。この会は森有礼をはじめ多数の日本人留学生に影響を与えたことで知られている。名和の書状にも、創設者「ハリス」の名や、会の農場があった「プロクトン」という地名が散見された。会は神秘主義的なキリスト教の一派で、また日々の激しい労働奉仕を義務づけており、プロクトンはその実践場所であ

一三はこの留学でドイツに行き、政治学が有益であった感想を述べている（『景翁伝』）。明治政府が政治諸制度のモデルをドイツに変えて行こうとしている時期であり、人気の留学先も英米からドイツに変わっている。一三の留学もこうした事情に影響されている。

知事時代（兵庫県赴任以前）

同郷の長州藩士内海忠勝より情報を得ている書状が興味深い。内海は一三と同郷のよしみということもあり、詳細な情報が一三にもたらされている。たとえば、明治二十五年（一八九二）、第一次松方正義内閣から第二次伊藤博文内閣に交替する時期の政治状況について、神奈川県知事であった内海忠勝が一三に書き送った書状がある⁽¹¹⁾。

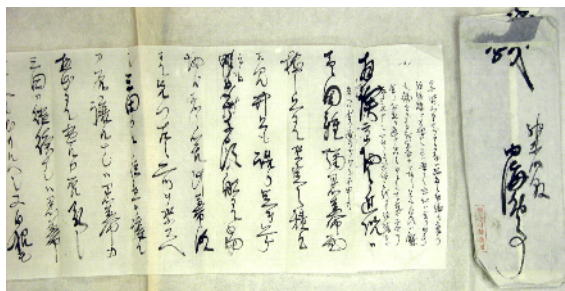


写真4 内海忠勝書状

当時成長著しい政党の動きも含め、複雑で流動的な政局に内海自身、危機感を抱いている様子が述べられている。また別史料で内海は同藩出身の伊藤博文や山県有朋などの「維新の元勳」たちを「黒幕」と表現しており、当時の政治状況に関する見方の一端が伺われ興味深い。

このほか他府県知事よりの書簡もある。戦前の知事は官選知事なので官僚の性格が強く、知事同士の情報交換も現在よりも気軽なものであったようだ。書簡の中には更迭人事の受け皿として他府県に受け入れを要請する史料もあつた。

兵庫県知事時代

県政に関わる史料はほとんどないが、兵庫県や神戸市にとつて重要な神戸築港の史料がある⁽¹²⁾。

神戸港の築港は明治二十九年（一八九六）五月に神戸市会の建議により神戸築港が検討され始めた。修築案件は大阪港と競合し、再度の上申によつても政府から計画の承認が得られないなど、紆余曲折を経て許可された。明治四十年（一九〇七）にやつと第一期工事（大正十一年一九二二）が着工する。

この際、明治三十八年（一九〇五）十一月に三十九年度の政府予算概算が閣議決定されたが、この決定のうちに神戸港築港案件が含まれていた。神戸港の築港工事が内閣に承認を得たことを当時大蔵次官であった阪谷芳郎が右の件を内々に服部一三に知らせた書状がある。

このほか、この時期には国政に関する史料がわずかに

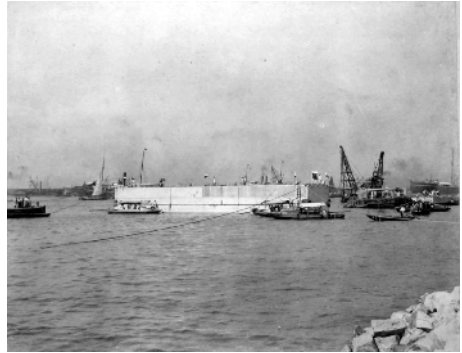


写真5 神戸築港工事

減が企画された。陸軍は節減案を了承するかわりに、朝鮮に二個師団増設をするよう要求した。陸軍の態度は強硬で内閣と対立して譲らず、結局西園寺内閣が総辞職することになった。これがいわゆる師団増設問題で軍部暴走の先がけ的な事件と評されている。一三はこうした問題に対して反対の立場を取り、西園寺の仇敵ともいっべき桂太郎に西園寺支持を促す電報を打とうとした。⁽¹³⁾

知事退任後・その他

大正五年（一九一六）に一三は兵庫県知事を辞任する。

見られた。一三は国政に関して意見することに躊躇ない性格であったことが『景翁伝』に触れられている。明治四十五年（一八九六）大正元年（一九一二）、明治天皇の大喪費を捻出するため政府予算の節

史料には辞表の写しがある。⁽¹⁴⁾ 病気や一身上の理由ではなく、後進に道を譲る「気持ちから職を辞すると述べている。

知事退任後は貴族院議員として、ベルギー視察などで活動した。また、国民精神運動の団体であった国本社というグループの支部長として活躍したが、史料にもその設立のさいに発会式を行ったときの出欠を連絡する書状が残されていた。⁽¹⁵⁾

このほか、美術関係の史料として一三の書と妻鈴子の絵がある。⁽¹⁶⁾

『景翁伝』によると一三は一万枚におよぶ浮世絵コレクションとして知られていた。その端緒は明治二十三年（一八九〇）開催の万国博覧会に展示された浮世絵を見てかららしい。所蔵の浮世絵は東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に保存されたという。一三の美術品収集は浮世絵だけではなく、近世絵画にも及んでいた。⁽¹⁷⁾ このようなコレクションは京都でも噂になっていたようで、とくに京都の女流画家が絵を見に服部邸に来訪した。史料では上村松園や伊藤小坡の弟子たちの訪問をつけている。⁽¹⁸⁾

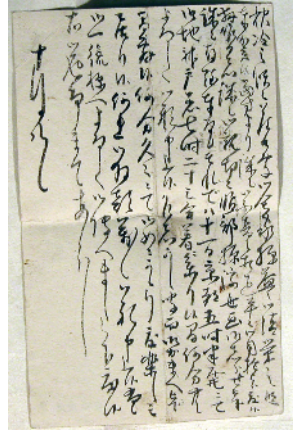


写真6 上村松園のはがき

これら女
流画家の縁
は、鈴子が
日本画をた
しなんでい
たことにも
理由がある

と思われる。たとえば妻鈴子の墨絵の師匠は跡見玉枝といい、東京にある跡見学園の創設者跡見花蹊のいとこで、桜の描き手として有名だった。このような師弟関係などから交際がひろがったことを推察するのである。

また史料群には知事の履歴に関係する写真および写真帳が残されている。これら写真はほとんどが兵庫県知事就任以降と推測される。なかでも兵庫築港工事の写真をはじめ、本史料群から『兵庫県百年史』に使用された写真がすべてであったことは幸いであった。

写真にはこのほか、神戸市の大倉山公園開園のさい同時に開催された伊藤博文像除幕式や、ドイツ人医師で北里柴三郎の師匠コッホの来神時（明治四十一年一九〇八）の集合写真などが収められた。

最後に銅像について述べておく。そもそも戦前に一三の死後昭和十六年（一九四一）に顕彰会が中心となって『景翁伝』の刊行と銅像の製作が行われた。鑄造は富山県高岡市の鑄物会社に依頼した。『景翁伝』によれば、折悪しく戦時中のこととて設置場所に困り、県や神戸市にかけあつたものの色よい返事がない。遺族も困り果て、結局政府に献納、つまり供出してしまったという。史料群に写真が残っており、『景翁伝』にも同じ写真が載せられている。県政資料館の像と比較しても同じサイズ・ポーズではないため、別像であることがわかる。本像に関しては製作の経緯が不明で、御子孫の伝聞としても残っていないようだ。

おわりに

以上のように戦前の県政がもつとも成熟した時期に県知事となった服部一三はその資料にも彼の人生の一部が反映されている。書簡が多く、読みにくい字も多い、というハンデ（？）があるものの、ひとたび史料の背景や記されていることを読み解いていくと、なかなか奥深い史料が多かった。

事件などを探るにはあまりに断片的な史料であるといふ欠点はあるが、他の史料や参考書などと結びつける事によって、謎解きができるという楽しみもあった。

本史料が近代の県政や国政の参考としてより活用されることを願ってやまない。

注

- (1) 昭和十八年(一九四三)
- (2) 一八三〇～一八九八 アメリカの宣教師。オランダ生まれ。安政六年(一八五九)布教のため来日。長崎奉行支配の済美館、佐賀藩の到遠館で長崎の留学生の指導にあたる。明治二年(一八六九)大学南校頭取、明治政府の外交・教育・法律制度顧問。明治十九年(一八八五)明治学院神学部教授、のち理事長。日本にて六十八歳で死亡。
- (3) 岩倉具忠『岩倉具視』『国家』と『家族』 二〇〇六年 財団法人国際高等教育研究所刊
- (4) 『男爵団琢磨伝』 昭和十二年(一九三七)
- (5) 服部一三知事関係資料 史料三一
- (6) 服部兵次郎『炉辺夜話』 昭和五十年(一九七五) 一四四頁
- (7) 『服部一三景翁伝』
- (8) ハーンの就職を服部一三が世話したという説がある。

たしかに面識があるし、就職斡旋の話をしていることはハーンの自伝などにも述べられている。しかし、今回事実としては確かめられなかった。

- (9) 服部一三知事関係資料 史料九四・九六
- (10) 服部一三知事関係資料 史料二八九
- (11) 服部一三知事関係資料 史料七一
- (12) 服部一三知事関係資料 史料二九
- (13) 服部一三知事関係資料 史料一三五
- (14) 服部一三知事関係資料 史料五
- (15) 服部一三知事関係資料 史料二七二
- (16) 服部一三知事関係資料 史料三四七～三四八、三五一～三五四
- (17) 服部一三知事関係資料 史料一四八 円山応挙や酒井抱一など著名絵師の作を所蔵していたことが史料で確認できた。
- (18) 服部一三知事関係資料 史料二五五・二七三

(同志社大学非常勤講師・県政資料館嘱託職員)